

シャイな人の聞き手としての反応の検討¹⁾

吉田 琢哉・林 友愛²⁾

The effect of trait shyness on reactions as disclosure-recipients

Takuya YOSHIDA・Yume HAYASHI

Abstract

Trait shyness is one of the personality traits that can be considered as a cause of difficulty in communicating, and is considered to lead to psychosocial maladjustment, mediated by the lack of social skills. However, people with a high trait shyness may have a receptive response as of their need to avoid social rejection. In this study, we examined the influence of trait shyness on reactions as disclosure-recipients. The results of structural equation modeling revealed that the trait shyness suppressed active reactions toward self-disclosure, mediated by low need for social approval, while it promoted receptive responses, mediated by need to avoid social rejection. The relationship between trait shyness and psychosocial adjustment was discussed.

Key words

trait shyness, need for social approval, need to avoid social rejection, receptive response.

社会人として仕事をしていくうえで、コミュニケーション能力の重要性・必要性が言われて久しい。日本経済団体連合会が会員企業を対象に毎年実施している「新卒採用に関するアンケート調査」において、採用選考にあたって特に重視した点に関する質問で最も多く選ばれたのは、15年連続で「コミュニケーション能力」であった（日本経済団体連合会, 2017）。また、企業が学校教育に期待することとして、人格面では「対人コミュニケーション能力の養成」が中学校・高校と大学・大学院のいずれにおいても1位に挙げられている（経済同友会, 2016）。高等学校までのキャリア教育においても、社会とのかかわりの中で生活し仕事をしていく上での基礎となる力として、人間関係形成・社会形成能力の育成が重視されている（中央教育審議会, 2011）。近年では、大学を含む教育場面における、授業内や学級単位でのトレーニングの効果研究も報告されるようになってきた（e.g., 石川・岩永・山下・佐藤・佐藤, 2010; 小林・渡辺, 2017; 永井・新井, 2013; 太幡, 2016）。

このように産業組織と学校教育のいずれにおいてもコミュニケーション能力が重視される一方で、他者とのコミュニケーションに苦手意識を持つ人も一定数いる（JTB コミュニケーションデザイン, 2018）。コミュニケーションに対する苦手意識の原因として考えられる性格特性の一つが「特性シャイネス」である。特性シャイネスは、特定の社会的状況を越えて個人内に存在し、社会的不安という情動状態と対人的抑制という行動特徴をもつ症候群と定義される（相川, 1991）。特性シャイネスは社会不安と類似した概念であるが、対人場面に対する回避的行動が条件づけられている点が特性シャイネスの特徴とされる（Henderson, Gilbert, & Zimbardo, 2014）。特性シャイネスは社会的排斥や引きこもりの危険因子であり（Chen & Santo, 2016; Rubin & Coplan, 2004; Rubin,

1) 本研究は第二著者が岐阜聖徳学園大学に提出した卒業論文のデータを再分析しまとめなおしたものである。また本研究結果の一部は、東海心理学会第67回大会で発表された。

2) 名古屋市立楠小学校

Coplan, & Bowker, 2009), 特性シャイネスの高い人は友人や恋人との関係に満足感を感じにくく (Tackett, Nelson, & Busby, 2013; 對馬・松田, 2012), 孤独感や抑うつ傾向が強い (藤井・澤海・相川, 2015; Jackson, Fritch, Nagasaka, & Gunderson, 2002; Murberg, 2009) など, 心理社会的不適応との関連が指摘される。

特性シャイネスが心理社会的不適応を導くメカニズムとして, 社会的スキルの不足が想定される。社会的スキルは対人関係を円滑に運ぶために役立つスキルを意味する (菊池, 1988)。社会的スキルの構成要素についてはさまざまな説が挙げられているが, 従来のスキル尺度を理論的に統合し, 本邦における代表的な心理尺度の一つである ENDCOREs を開発した藤本・大坊 (2007) によれば, 社会的スキルは表出系, 反応系, 管理系の3種に大別される。表出系とは, 表現力や自己主張といった形で表れる対人場面での情報発信の能力・指向性を, 反応系とは解読力や他者受容といった形で表れる対人場面での情報受信の能力・指向性を, 管理系とは自己統制や関係調整といった形で表れる自他の制御の能力・指向性を意味する。

これまでの実証研究から, 特性シャイネスは心理社会的な適応指標だけでなく社会的スキルの多くの側面とも負の関連が示されており (相川, 1991; Grose & Coplan, 2015; 徳永・稲畑・原田・境, 2013), 特性シャイネスが心理社会的不適応に結びつくのは, 対人場面やストレスのかかる状況において適切な対処をとることができず, 自己評価が低下するためと考えられている (後藤, 2001)。Findlay, Coplan, & Bowker (2009) は特性シャイネスが不適応を導くのは情動焦点型コーピングが原因であるとし, 内在的コーピングが間接効果を示すことを報告している。内在的コーピングとは, ストレスのかかる状況で過度に感情的になりそれを出ししない方略を表しており, Findlay et al. (2009) は管理系スキルの不足が特性シャイネスと不適応との関連を説明することを示したと言える。

ただし, 特性シャイネスの高い人は社会的スキルの全ての側面が一様に不足しているとは限らない。本研究ではシャイな人の聞き手としての反応に注目する。対人場面において聞き手として求められるスキルとして, 特にネガティブな感情体験の開示場面においては, 「受容的反応」が円滑な対人関係にとって重要である。受容的反応は, 自己開示する者の再解釈を促し, 抑うつ状態に陥るのを防ぎ, 成長感の獲得を促すといった効果が示唆されている (山田・及川, 2016; 吉田, 2012)。受容的反応は藤本・大坊 (2007) の尺度における他者受容に類似する概念であるが, 特性シャイネスと受容的反応や他者受容との関連を検討した研究は見当たらない。日向野・小口 (2007) は, 特性シャイネスの高い人ほど自他の行動や評価に対する懸念が大きいとの相関関係を報告している。ここでの「懸念」は対面苦手意識の一側面に位置づけられているものの, 懸念の大きい人ほど他者との接し方に気を配っているとも言える。つまり, 特性シャイネスの高い人は, 相手からの拒絶を恐れるために, 受容的な反応を心がけている可能性が考えられる。

特性シャイネスと聞き手としての反応を検討するうえで, 特性シャイネスの高い人が持つ2つの欲求を考慮に入れる必要がある。菅原 (1998) は, 特性シャイネスは対人不安傾向と対人消極傾向の2つの要素から構成されており, 対人不安傾向は拒否回避欲求の高さ, 対人消極傾向は賞賛獲得欲求の低さによって特徴づけられていることを明らかにしている。「拒否回避欲求」とは, 他者の評価に対して, 他者から否定的な評価を避けようとする傾向を, 「賞賛獲得欲求」とは, 他者から肯定的な評価を得ようとする傾向として概念化されている (小島・太田・菅原, 2003)。

本研究では, 特性シャイネスが賞賛獲得欲求および拒否回避欲求を媒介して聞き手としての反応に与える影響について検討することを目的とする。拒否回避欲求の高さは対人相互作用場面におけ

る慎重な対応に反映されると考えられることから、特性シャイネスの高い人は、拒否回避欲求に基づき、相手に不快感を与えて自分の印象を下げることをしないよう、受容的反応を実行していると予想される。すなわち、特性シャイネスと聞き手としての受容的反応との関連は、拒否回避欲求によって媒介されると考えられる。

また、聞き手としての反応のなかには、表出系スキルを必要とする反応も含まれる。森脇・坂本・丹野（2002）は、自分や他者が自己開示を行った場面で受容的と感じた行動・反応についての自由記述の結果から聞き手の受容的反応尺度を作成し、因子分析によって、真剣な姿勢、アドバイス、親身な行動、共感の4因子を抽出している。このうち、特にアドバイスについては問題解決につながる発話を必要とすることから、表出系のスキルが求められると言える。特性シャイネスの高い人は対人消極傾向が強く賞賛獲得欲求が低いため、会話場面において積極的に話すことは少ない。したがって、特性シャイネスの高い人は聞き手としての反応のなかでも表出系スキルを伴う反応をとりにくく、その影響は賞賛獲得欲求の低さによって媒介されるだろう。

方 法

対象者と手続き

G 県内の私立大学において、3つの授業の中で質問紙を配布した。調査に同意して調査票を提出した学生210名のうち、回答に不備のあった6名分を除き、204名（男性98名、女性106名、平均年齢18.76歳、 $SD = 0.79$ ）のデータを分析対象とした。

調査内容

本研究で分析に用いた変数は以下の3つである。

① 特性シャイネス 相川(1991)が作成した特性シャイネス尺度への回答を求めた。本尺度は、「私は新しい友人がすぐできる」「私は人がいるところでは気おくれしてしまう」などの16項目からなる。回答は「1. あてはまらない」から「5. あてはまる」までの5件法で求めた。本尺度の信頼性係数 α は.93であった。

② 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求 小島他(2003)が作成した賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度への回答を求めた。本尺度は、「人と話すときにはできるだけ自分の存在をアピールしたい」などの9項目からなる「賞賛獲得欲求」、「意見を言うとき、みんなに反対されないかと気になる」などの9項目からなる「拒否回避欲求」の2因子からなる。回答は「1. あてはまらない」から「5. あてはまる」までの5件法で求めた。信頼性係数 α は賞賛獲得欲求が.85、拒否回避欲求が.88であった。

③ 聞き手としての反応 森脇他(2002)が作成した聞き手の受容的反応尺度への回答を求めた。本尺度は「真剣に聞く」などの6項目からなる「真剣な姿勢」、「具体的にアドバイスをする」などの5項目からなる「アドバイス」、「解決の行動まで一緒にとる」などの6項目からなる「親身な行動」、「同感する」などの5項目からなる「共感」の4因子からなる。回答は「1. 全然あてはまらない」から「4. とてもあてはまる」までの4件法で求めた。

結 果

聞き手の受容的反応の因子構造

聞き手の受容的反応については、尺度を作成した森脇他（2002）に因子数の決定について明確な根拠が記載されていないため、改めて探索的因子分析を行った。スクリープロットを算出し、固有値の減衰状況（7.28, 2.13, 1.45, 1.27, 1.09…）と最小偏相関平均（Velicer, Eaton, & Fava, 2000）を踏まえ、因子数を2と指定した探索的因子分析（最尤法、プロマックス回転）を実施した。因子負荷量が.35を下回った1項目（「解決の行動まで一緒にとる」）を削除し、改めて因子分析を行ったところ、Table 1に示す結果となった。第一因子には原尺度の「真剣な姿勢」「共感」「親身な行動」に相当する項目が負荷し、これらは相対的に表出系スキルを必要としない反応であり、純粋に受容的な反応を示すことから、「受容的な聞き手反応」と命名した。第二因子には「アドバイス」の全項目と、「真剣な姿勢」「共感」の一部の項目が負荷し、これらは自身の発話を伴う反応であり表出系スキルを必要とすることから、「表出系スキルを伴う聞き手反応」と命名した。

Table 1 聞き手の受容的反応尺度の探索的因子分析結果

	F1	F2
< F1 受容的な聞き手反応 >		
気が休まるまで一緒にいる	.76	-.09
話し手が楽になるように心がける	.72	-.13
興味をもって聞く	.67	.05
一緒に考える	.65	.14
最後まで時間をかけて聞く	.63	-.03
共感する	.61	-.16
好意的に反応する	.60	-.11
同感する	.60	-.17
真剣に聞く	.59	.19
親身になる	.55	.09
真剣な目で聞く	.50	.18
結論が出るまで聞く	.49	.16
相手の話に対して、心から喜んだり悲しんだ	.46	.08
真剣に考える	.44	.37
相手と自分との受け答えがうまく成立する	.37	.10
すばやく反応するよう心がけている	.36	-.01
< F2 表出系スキルを伴う聞き手反応 >		
具体的にアドバイスをする	-.16	.82
様々な角度からアドバイスをする	-.15	.77
適切なアドバイスをする	-.09	.75
相手の話に対して、思ったことを率直に話す	.12	.47
自分も自身の体験を話す	.20	.40
因子間相関	F1	.52

特性シャイネスが聞き手としての反応に及ぼす影響

特性シャイネスが賞賛獲得欲求・拒否回避欲求に影響し、賞賛獲得欲求が表出系スキルを伴う聞き手反応に、拒否回避欲求が受容的な聞き手反応に影響するとの仮説モデルを、構造方程式モデリングにより検証した。適合度はCFI = .895, TLI = .791, RMSEA = .129であった。いずれの指標

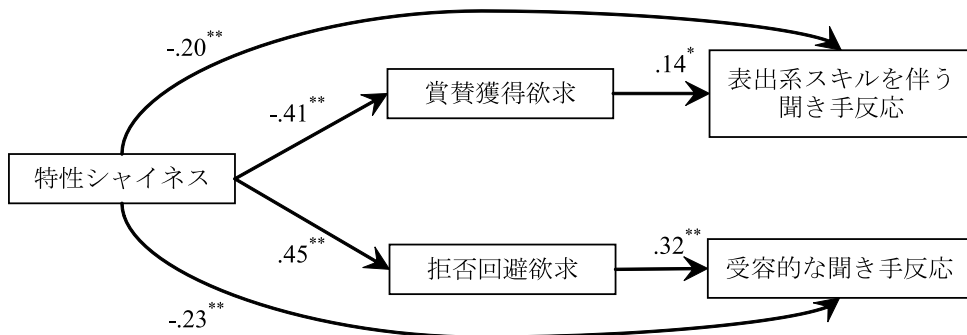
も不十分な値を示したことから、特性シャイネスから聞き手の受容的反応への直接的なパスも想定して再分析を行った。その結果、CFI = .970, TLI = .901, RMSEA = .089と十分な適合度を示した。基礎情報としての相関係数を Table 2 に、構造方程式モデリングの結果を Figure 1 に示す。特性シャイネスは賞賛獲得欲求に負の、拒否回避欲求に正の影響を示した。賞賛獲得欲求は表出系スキルを伴う聞き手反応に正の、拒否回避欲求は受容的な聞き手反応に正の影響を示した。

次に間接効果を検証するため、リサンプリング数を 5000 回に設定したバイアス修正ブートストラップ法により 95% ブートストラップ信頼区間 (CI) を推定した。分析には Mplus 7.4 (Muthén & Muthén, 1998-2015) を用いた。その結果、特性シャイネスが賞賛獲得欲求を媒介して表出系スキルを伴う聞き手反応に及ぼす影響と、拒否回避欲求を媒介して聞き手の受容的反応に及ぼす影響のいずれも 95% CI が 0 を含んでおらず、有意な間接効果が認められた (表出系スキルを伴う聞き手反応 $B = -0.01$, 95% CI [-0.03, -0.001], 聞き手の受容的反応 $B = 0.07$, 95% CI [0.03, 0.12])。

Table 2 分析に用いた変数間の相関係数

	1.	2.	3.	4.
1. 特性シャイネス				
2. 賞賛獲得欲求	-.41 **			
3. 拒否回避欲求	.45 **	-.08		
4. 受容的な聞き手反応	-.09	.03	.21 **	
5. 表出系スキルを伴う聞き手反応	-.25 **	.20 **	-.10	.46 **

** $p < .01$, * $p < .05$



注) 聞き手としての反応の下位因子間の共分散の表記は省略している。

Figure 1 構造方程式モデリングの結果

考 察

本研究の目的は、特性シャイネスが賞賛獲得・拒否回避欲求を媒介して聞き手としての反応に与える影響について検討することであった。特性シャイネスから賞賛獲得欲求へは負の、拒否回避欲求に対しては正の影響が見られた。この結果は菅原 (1998) と整合的であり、特性シャイネスには対人不安傾向と対人消極傾向の 2 つの要素が含まれることが示唆される。また、聞き手としての反応について、森脇他 (2002) の尺度を因子分析したところ、表出系スキルを伴う聞き手反応と受容

的な聞き手反応の2因子が抽出された。他者の自己開示に直面した当事者にとっては、社会的スキルの理論的枠組み（藤本・大坊, 2007）に対応して、表出系スキルを伴うかどうかという観点から聞き手としての反応が弁別されていることが伺われる。

特性シャイネスが聞き手としての反応に与える影響は、賞賛獲得欲求と拒否回避欲求のどちらを経由するかにより異なることが示唆された。賞賛獲得欲求は、表出系スキルを伴う聞き手反応に対して正の影響を示した。間接効果が有意であったことから、特性シャイネスは、賞賛獲得欲求の低さを媒介して、表出系スキルを伴う聞き手反応を抑制することを意味している。特性シャイネスの高い人は、対人関係の維持に消極的であるがゆえに、積極的な発言を要する反応をとりにくいであろう。

一方で、特性シャイネスが拒否回避欲求の高さを媒介して受容的な聞き手反応を促進するとの間接効果も見られた。この結果は、特性シャイネスの持つ対人不安傾向という要素が、社会的スキルの一側面である受容的反応を促進していることを示唆している。相手から否定的な評価を受けることを回避したいという欲求が、社会的に適切な反応を導いていると考えられる。これまで特性シャイネスの高い人の特徴として、表出系スキルや管理系スキルの乏しさが注目されており（後藤, 2001）、実証的にもその関連の大きさが頑健に示されてきた（相川, 1991; Findlay et al., 2009; Grose & Coplan, 2015; 徳永他, 2013）。反応系スキルに関しては知見が乏しかったが、本研究の結果に基づく、特性シャイネスの高い人は全ての社会的スキルが不足しているとは限らず、他者受容に関しては他のスキルほど苦手意識は高くないのかもしれない。

以上の結果は、特性シャイネスの高い人の心理社会的適応を高める有効な方法を検討するうえでの示唆に富む。具体的には、特性シャイネスの高い人に適合する社会的スキルトレーニングの改善に貢献するとの意義を持つ。特性シャイネスは拒否回避欲求を媒介する形で聞き手としての受容的反応に結びついていたことから、トレーニングの初期に反応系スキルの向上を目的とするプログラムを導入することが有効であるかもしれない。特性シャイネスの高い人は表出系スキルと管理系スキルが不足していることから、最終的にはこれらのスキルを高めるためのプログラムを実施する必要がある。しかしながら、反応系スキルを改善するプログラムを初期に配置し、従来から持っている反応系スキルを伸ばすことを意識させるような働きかけを行うことで、スキルトレーニングへの動機づけの向上が見込まれる。また、近年では授業内や学級単位でのスキルトレーニングも増えている（e.g., 石川他, 2010; 小林・渡辺, 2017; 永井・新井, 2013; 太幡, 2016）。こうしたプログラムに参加する人の中にも特性シャイネスの高い人は一定数いることから、個人の持つ対人不安傾向と対人消極傾向を踏まえてのトレーニングの進め方にも配慮をすべきであろう。

本研究では賞賛獲得欲求と拒否回避欲求に注目することで、特性シャイネスの高い人の聞き手としての反応傾向を明らかにすることができた。ただし、特性シャイネスから聞き手としての反応への影響はこれら2種の欲求に完全に媒介されたわけではない。特性シャイネスからは、表出系スキルを伴う聞き手反応と受容的な聞き手反応のいずれに対しても直接的な負の影響も見られた。特性シャイネスから聞き手としての反応の決定に至るプロセスを明らかにするうえでは、賞賛獲得欲求と拒否回避欲求以外の規定因を検討する必要がある。たとえば、特性シャイネスの高い人は対人関係に消極的なだけでなく、より積極的に対人関係を避けようとする対人拒絶傾向を持つとの指摘がある（Luster, Nelson, & Busby, 2013）。特性シャイネスが高い人のなかでも特に対人拒絶傾向を持つ人は、表出系スキルを伴う聞き手反応だけでなく、受容的な聞き手反応も実行しないのかもしれない。

最後に本研究の限界と今後の展望について述べる。本研究では社会的スキルのうち、聞き手としての反応のみを扱った。特性シャイネスと社会的スキルとの関連を明らかにするためには、包括的な社会的スキルの枠組みに基づいたより詳細な検討が必要である。また、特性シャイネスが心理社会的適応に影響するメカニズムとして、社会的スキル以外の媒介要因も考えられる。Murberg (2009) や Tan, Ai, Wen, Wu, & Wang (2016) は、特性シャイネスが「社会的サポートの不足」を媒介して、抑うつや孤独感といった心理社会的適応の指標に影響することを報告している。対人消極傾向ゆえに普段から対人関係を構築していないために、ストレス状況下においても適切な社会的サポートを与えてくれる他者がおらず心理社会的不適応に至るとの想定も可能である。Horsch (2006) が実験的検討により明らかにしているように、特性シャイネスの高い人は援助要請を行いにくく、そのことが社会的サポートを得られない一因と考えられる。ただし、本研究で扱った受容的反応を発揮して日頃から対人関係を構築することで、社会的サポートの充足を図ることも可能であろう。今後は個人の対人関係を含めて、特性シャイネスの高い人の心理社会的不適応を予防しやすい方策を検討していくことが望まれる。

引用文献

- 相川 充 (1991). 特性シャイネス尺度の作成および信頼性と妥当性の検討に関する研究 心理学研究, 62, 149-155.
- 相川 充 (2006). ソーシャルスキル教育の14の基本スキル 相川充・佐藤正二 (編) 実践! ソーシャルスキル教育—中学校— (pp.44-51) 図書文化
- Chen, B. B., & Santo, J. B. (2016). The relationships between shyness and unsociability and peer difficulties: The moderating role of insecure attachment. *International Journal of Behavioral Development*, 40, 346-358.
- 中央教育審議会 (2011). 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について (答申) Retrieved from http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf (2018年9月28日)
- Findlay, L. C., Coplan, R. J., & Bowker, A. (2009). Keeping it all inside: Shyness, internalizing coping strategies and socio-emotional adjustment in middle childhood. *International Journal of Behavioral Development*, 33, 47-54.
- 藤井 勉・澤海 崇文・相川 充 (2015). 顕在的・潜在的シャイネスと心理的適応との関連 感情心理学研究, 22, 128-134.
- 藤本 学・大坊 郁夫 (2007). コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み パーソナリティ研究, 15, 347-361.
- 後藤 学 (2001). シャイネスに関する社会心理学研究とその展望 対人社会心理学研究, 1, 81-92.
- Grose, J., & Coplan, R. J. (2015). Longitudinal outcomes of shyness from childhood to emerging adulthood. *The Journal of Genetic Psychology*, 176, 408-413.
- Henderson, L., Gilbert, P., & Zimbardo, P. (2014). Shyness, social anxiety, and social phobia. In S. G. Hofmann & P. M. DiBartolo (Eds.), *Social anxiety: Clinical, developmental, and social perspectives* (3rd ed.) (pp. 95-115). San Diego, CA: Elsevier Academic Press.
- Horsch, L. M. (2006). Shyness and informal help-seeking behavior. *Psychological Reports*, 98, 199-204.
- 日向野 智子・小口 孝司 (2007). 学級集団内地位とパーソナリティ特性からみた対面苦手意識 実験社会心理学研究, 46, 133-142.
- 石川 信一・岩永 三智子・山下 文大・佐藤 寛・佐藤 正二 (2010). 社会的スキル訓練による児童の抑うつ症状への長期的効果 教育心理学研究, 58, 372-384.
- Jackson, T., Fritch, A., Nagasaka, T., & Gunderson, J. (2002). Towards explaining the association between shyness and loneliness: A path analysis with American college students. *Social Behavior and Personality*, 30, 263-270.
- JTBコミュニケーションデザイン (2018). コミュニケーション総合調査<第3報>発表 Retrieved from <https://www.jtbcom.co.jp/article/hr/547.html> (2018年9月28日)

- 経済同友会 (2016). 「企業の採用と教育に関するアンケート調査」結果 Retrieved from <https://www.doyukai.or.jp/policyproposals/articles/2016/pdf/161221b.pdf> (2018年9月28日)
- 菊池 章夫 (1988). 思いやりを科学する 川島書店
- 小林 朋子・渡辺 弥生 (2017). ソーシャルスキル・トレーニングが中学生のレジリエンスに与える影響について 教育心理学研究, 65, 295-304.
- 小島 弥生・太田 恵子・菅原 健介 (2003). 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み 性格心理学研究, 11, 86-98.
- Luster, S. S., Nelson, L. J., & Busby, D. M. (2013). Shyness and communication: Impact on self and partner relationship satisfaction. *Journal of Couple and Relationship Therapy*, 12, 359-376.
- 森脇 愛子・坂本 真士・丹野 義彦 (2002). 大学生における自己開示方法および被開示者の反応の尺度作成の試み 性格心理学研究, 11, 12-23.
- Murberg, T. A. (2009). Shyness predicts depressive symptoms among adolescents: A prospective study. *School Psychology International*, 30, 507-519.
- Muthén, L. K., & Muthén, B. O. (1998-2015). *Mplus user's guide: Statistical analysis with latent variables* (7th ed.). Los Angeles, CA: Muthén & Muthén.
- 永井 智・新井 邦二郎 (2013). ピア・サポートトレーニングが中学生における友人への援助要請に与える影響の検討 学校心理学研究, 13, 65-76.
- 日本経済団体連合会 (2017). 「2017年度新卒採用に関するアンケート調査」の集計結果 Retrieved from <https://www.keidanren.or.jp/policy/2017/096.pdf> (2018年9月28日)
- Rubin, K. H., & Coplan, R. J. (2004). Paying attention to and not neglecting social withdrawal and social isolation. *Merrill-Palmer Quarterly*, 50, 506-534.
- Rubin, K. H., Coplan, R. J., & Bowker, J. C. (2009). Social withdrawal in childhood. *Annual Review of Psychology*, 60, 141-171.
- 菅原 健介 (1986). 賞賛されたい欲求と拒否されたくない欲求 心理学研究, 57, 134-140.
- 菅原 健介 (1998). シャイネスにおける対人不安傾向と対人消極傾向 性格心理学研究, 7, 22-32.
- 太幡 直也 (2016). 大学生のチームワーク能力を向上させるトレーニングの有効性—チームワーク能力の構成要素に着目して— 教育心理学研究, 64, 118-130.
- Tackett, S. L., Nelson, L. J., & Busby, D. M. (2013). Shyness and relationship satisfaction: Evaluating the associations between shyness, self-esteem, and relationship satisfaction in couples. *The American Journal of Family Therapy*, 41, 34-45.
- Tan, J., Ai, Y., Wen, X., Wu, Y., & Wang, W. (2016). Relationship between shyness and loneliness among Chinese adolescents: *Social support as mediator. Social Behavior and Personality: an International Journal*, 44, 201-208.
- 徳永 沙智・稲畑 陽子・原田 素美礼・境 泉洋 (2013). シャイネスと被受容感・被拒絶感が社会的スキルに及ぼす影響 徳島大学人間科学研究, 21, 23-34.
- 對馬 淑乃・松田 英子 (2012). 特性シャイネス及び感情表出の制御が友人関係満足感及び友人行動量に及ぼす影響 ストレス科学研究, 27, 55-63.
- Velicer, W. F., Eaton, C. A., & Fava, J. L. (2000). Construct explication through factor or component analysis: A review and evaluation of alternative procedures for determining the number of factors or components. In Goffin, R. D., & Helmes, E. (Eds.), *Problems and solutions in human assessment: Honoring Douglas N. Jackson at Seventy* (pp. 41-71). Boston: Kluwer Academic Publishers.
- 山田 詩織・及川 恵 (2016). 適切な自己開示方法と聞き手の受容的反応および抑うつとの関連 パーソナリティ研究, 24, 225-227.
- 吉田 琢哉 (2012). 青年期女子における怒りの感情体験による自己成長感の獲得 感情心理学研究, 20, 1-8.